

西高サッカー部 60 周年記念 CD

目次

1. 「卒業」・・・飯島敦（西高 29 期）
2. 「ありがとうの気持ち」・・・千葉のり子(西高 51 期)
3. 「生涯の仲間たちに向けて」・・・中込浩樹(西高 52 期)
4. 「入学式」・・・松井俊子(西高 53 期)
5. 「西高サッカー部について」・・・長谷川瑛子(西高 54 期)
6. 「サッカー部での 3 年間」・・・中島篤(西高 55 期)
7. 「56 期」・・・牛込陽介(西高 56 期)
8. 「西高サッカー部 57 期の思い出」・・・御巫清英(西高 57 期)
9. 「西高サッカー部で得たもの」・・・斉藤潤（西高 58 期）
10. 「西高サッカー部創立 60 周年記念を祝して」・・・加藤裕（西高 59 期）

卒業

29期 飯島 敦

卒業後の4月初旬、お世話になった顧問の岡田先生と石川コーチ、一期先輩（小笠原さんと松本さん）と後輩の30期生にも入ってもらい、桜の下で写した写真です。受験疲れか、現役時代はもっともっと精悍な姿だったはずですが、顧問であられた（故）岡田先生やコーチの石川さんには大変お世話になりました。写真の懐かしい顔を見ていると、走馬灯のように当時の日々の記憶が蘇ってきます。



毎日毎日サッカーのことだけを考え、ひたすら練習に汗を流していたこと。芝生化でグラウンドが使えずに、プール脇の狭いところでひたすら一対一の練習に明け暮れたこと。西高での夏合宿で、暑く埃舞うグラウンドで黙々と走り続けたこと。（淡々とした顔で延々と『走れ』と指示していた石川コーチの鬼のような姿が忘れられません）練習で疲れ果て、立てずにボーと女子テニス部の練習を眺めていたこと。（顔にテニスコートの金網模様がついてしまったメンバーもいました）

2年生の時の夏の全国選手権予選で、早稲田高等学院のグラウンドにてあっけなく地区大会予選で敗退したこと。しかし、その冬の練習で一廻りも二廻りも成長し、本当に強い良いチームになったこと。杉並大会で2連続優勝と準優勝を勝ち取り、常勝西高との名を手に入れたこと。

マネージャーも含めて各自の個性がとても強く、何時も何だかんだと言いついていましたが、結局はまとまりのある、EYE コンタクトが可能な良いチームだったと思います。最後の大会で主力の岡本選手が試合で顔面骨折し、止むを得ず戦線離脱せざるを得なかったことは、今でも残念です。我々29期妹生は、春の関東大会、インターハイ予選と連続してベスト8。東京が東西に分かれる前であることや、何れも最後は初の高校生全日本選手の高橋を擁し全国制覇した帝京と戦い敗れたこと等を考えると、本当に東京でも強いチームだったと思います。（帝京とは2試合合計で1対14でしたが）

当時では珍しく、3年夏前のインターハイ予選までサッカーを続けたことは、チームの誇りだと思っていますが、今となっては、夏過ぎの正月全国選手権予選まで続けなかったことが悔やまれます。しかし、後輩の30期生がその大会でベスト4まで進出してくれたことが救いであるとともに、本当に西高サッカー部の一つの黄金期だったのではないかと思います。

最近、マネージャーとして活躍してくれた恩田さんと木川さん（何れも旧姓）の音頭で、時々当時のメンバーで集まって飲んでいますが、集まるとまるで昔に戻ったように当時の話で盛り上がっています。今でも、フットサルや子供の学校のコーチ・審判等々、サッカーから足を洗えずに燃えているメンバーも多くいます。西高サッカー部に栄えあり！！心から現役諸君にエールを送りたいと思います。

ありがとうの気持ち

51期 千葉 のり子

私は51期のマネージャーをしていた。
今、高校時代のサッカー部を振り返ってみる。
昨日のことにように思い出は鮮やかによみがえるが、もう10年が経つのだ。

51期はとにかく個性の強いメンバーだった。
性格も考え方も行動も基本的にはバラバラ。
情に厚い人、クールな理論派、目立つのが大好きなムードメーカー、協調性に優れた大人な人、我が強くて絶対に譲らない人、マイペース過ぎる人、物静かな慎重派 etc.
こんな集団だったから、顧問の先生方はさぞかし手を焼いたのではないだろうか。(本当にお世話になりました。)
そしてよくチームとしてまとまったものだと感心する。

休み時間や放課後になると、廊下の一角を占領して大騒ぎしているみんなの姿をよく見かけた。
実のところ、これは女性陣から非常に評判が悪かった。
「怖くて通れないんだけど何とかしてよ。」というクレームは再三寄せられた。
しかし私としては、女子が怖がるから廊下に出るなどとは言える訳もなく、彼女たちには「怖くないからね」と訴えるしかなかったのだが。

それくらい、強烈なメンバーだったのだ。
全体的に体も大きかったから余計に存在感があった。

でも、私はそんなみんなが大好きだった。
いつもおなかが痛くなるくらい笑わせてもらえたり、声を張り上げてグラウンドを駆け巡る姿はとっても眩しかった。
普段の練習風景、試合後の打ち上げ、運動会の啞然、夏合宿、沖縄旅行、そして初めての都大会。
キラキラした思い出が山ほどある。サッカー部の一員でいられて本当によかったと心から思う。
そしてみんなは、私が何かをすると、例えそれがどんな小さなことであっても、

「ありがとう」っていつも言ってくれたし、私をととても大切に扱ってくれた。

つい若さ全開の奇抜な行動ばかりに目が行ってしまい、当時は気がついてあげられなかったけど、みんな立派な紳士だったね。本当にありがとう。

そして、これからもずっと仲良くしていこうね。

生涯の仲間たちに向けて

52期 中込 浩樹

西高サッカー部 60 周年記念文集。いざ書こうとすると、正直、何を書いているのか分からず、色々と思いついてみた。全てが自由であると、逆に難しい。何せ、もう 10 年近くも昔のことであり、手元にあるのは卒業旅行に行った時の写真などばかりで、サッカーをしているものなど 1 枚もない。悩んだ挙句の答えは、私の思い出話くらいしかないということ。そして、この文章を西高生活の 3 年間、家族以上に一緒にいた同期のみんなへ読んでもらいたいという想いを持って書きたいってくらいしか思い付かなかった。

今、西高生活の 3 年間を思い返すと、「馬鹿ばっか」という言葉が浮かび上がります。私たちの代は、色々な意味で「馬鹿」がいっぱいいた代ではなかったのでしょうか。私たちの代は、決して強いチームではなかった。都大会出場を目標にする程度であり、今のチームの人から見れば、そこそこくらいかも知れませんが、気持ちはどの代にも負けにくいくらい強いチームだったのではないのでしょうか。個々人が少しでも上手くなるために、チームとして少しでも強くなれるようにと毎日毎日、サッカーばかりに励む日々でした。朝練して、早弁して、昼休みにミニゲーして、放課後に練習して、ファミレスでドリバ飲んで帰宅。そんな毎日が、辛くも楽しく過ごしたことを今でも思い返されます。顧問の菅井先生とは、言い合いになることも多々ありましたが、それこそ強くなりたいという気持ちがあってこそだったとっております。自分の人生の中で、あんなに 1 つのことしかやらない生活は、最初で最後であったと思います。

サッカーばかりしていた一方で、学校のイベントには欠かさず出演していました。私たちに近い代の方々は知っているかと思いますが、「啞然」です。体育祭、記念祭はもちろん、卒業式まで出演するほどの大活躍でした。スカートが破けたり、意外とうけずにへこんだりと、色んなトラブルはあったけど、一つ一つが歴史に残る名舞台だったのではないのでしょうか。

西高サッカー部 52 期。これは、サッカー馬鹿であり、イベント馬鹿です。しかし、こんな「馬鹿」な仲間に出会え、そして今も一緒に飲んだり出来ることは、きっと大切なことであると思います。西高サッカー部 52 期のみんなへ、本当にありがとう。私にとって、みんなと過ごした 3 年間は、今の自分にとって大きな時間でした。そして、これからは結婚とか子供とか、色んなことが待っていると思います。そうした各自の人生の一部に、サッカー部の仲間と過ごすことが出来たらと思っています。

皆様、これからも宜しくお願いします。まずは、結婚式での啞然かな。誰が 1 番の餌食になるのか……。

入学式

53期 松井俊子

高校でやりたい部活動の話。西高合格が決まったときから入学式の日まで、私の頭の中に「マネージャー」という選択肢は微塵もなかった。

入学式後、保護者会が終わるのを待ってから、母と一緒に他の新入生よりも遅めに校舎を出ようとしたとき、そこへ、5、6人の上級生が寄ってきた。全員男。「サッカー部マネージャー大募集」と書かれたノートの端切れのようなヨレヨレの紙を渡され、マネージャーに勧誘された。しかし、いろいろなことがよくわからなくて、頭の中がパニックだった。入学式中庭で部活動勧誘をするのが毎年の恒例であることなど、当時の私は知る由もなかったので、まず、今私がされていることが部活動の勧誘なのだと理解するまでに時間がかかった。そして、マネージャーになりたいという気持ちがない上に、突然複数の知らない上級生にすごい勢いで話しかけられている。本当にパニックだった。

それからの新入生としての生活は、いかにマネージャーを断るかで頭がいっぱいだったが、流れで、どうしても拒否できなくて、説明会や見学に行ってしまった。しかし、そこで会ったマネージャーの先輩はすごくいい人で、少し前向きに考えられるようになり、最終的に入部を決めた。

入部当初の私は、その後の高校生活が、部活のおかげでこんなにも充実したものになるとは正直思っていなかった。しかし今では、入学式に私を勧誘してくれた先輩方に心から感謝している。彼らのおかげで、卒業した今でも仲良くしてくれる先輩、同級生、後輩に巡り合えたのだから。

新しい世界を見るきっかけを与えてくれてありがとうございました。これからもどうぞよろしくお願い致します。ちなみに、入学式にもらったヨレヨレの紙は、今でも大事に持っています。

西高サッカー部について

54期 長谷川 瑛子

私は2年生の4月から、途中入部というかたちで西高サッカー部に加わった。運動部の一員として活動した最初で最後の1年間だったため、引退してから約6年経過してはいるが、一生忘れられない密度の濃い思い出である。

私の代(54期)は、新人戦で都大会出場という好成績を残した。サッカーの実力や結果もちろん素晴らしいと思うが、素人ということもあり、すごいプレーとはどういうものなのかは最後まで理解しきれなかった。私がそれよりも常に注目していたのが、彼らのひそかな「意識の高さ」である。

「試合に勝つ」という大きな目標を掲げ、それを達成するために自分には何が足りないかを考え実行する。(スタミナが足りないと感じたら走りこみで体力をつける等)また、怪我というリスクを避けるために、時間をかけて入念にストレッチを行ったり、少しでも体に異変が起こると無理をしないよう見学をしたりする。たまに、捻挫した部員から夜電話がかかってきて、「家でどう応急処置をすればいいのか」と聞かれたこともあった。自己管理の意識が、自分と同年とは思えない高いものであった。

それが、今まで無目的にだらだらと過ごしてきた私にとって、非常に衝撃的で刺激を受けたのを覚えている。(他の運動部員も自己管理は当たり前なのだと思う。しかし特に54期は普段シャイなうえ、努力を人に見せることが嫌いなように見えたので、最初は気がつかなかった。)

部員のほうが、プレーヤーであるうえ、仲間との関わりも濃いため、私よりもずっと悩むことも気づくことも多かったと思う。彼らはサッカー部で何を考えて何を得たのだろうか。シャイな人たちなので話してもらえるかはわからないけど、大人になった今、一度お酒でも飲みながらゆっくり聞いてみたい。

サッカー部での三年間

55期 中島 篤

自分にとって高校三年間はサッカー漬けの日々だった。そんなにサッカーが強い学校ではないと思って見学して、意外に強いことに驚いた記憶がある。自分は高校でも部活をやろうと決めていたので、迷わずサッカー部を選んだ。

我が55期はその当時では珍しく20人を超えた大所帯だった。試合に出られる人数は限られているので、厳しい環境ではあったが、自然な役割分担ができてみんな仲が良かった。54期で都大会まで行き、その試合に出ていた人も多かったのも、目標は高かった。55期の初戦となった専修大付属との練習試合が自分にとっては印象深く、『うちの代はいける』という手ごたえを掴めた試合だった。その後の練習試合でも、勝ち負けあったが、地区予選を勝ち上がるだけの力はあると思っていた。しかし、勝負強さが足りなかったのか、結果的には地区予選を勝ち上がることはできず、大会で好成績を残すには至らなかった。

そんな3年間のサッカー部の活動のなかで、やはり自分にとってはオランダ遠征が最大のイベントだった。有志での遠征ということもあって、大会を控えた「高校生のチーム」としてはマイナスであったかもしれない。けれど、行った人行かなかった人どちらにも大きな影響を与えたのは間違いないと思う。そして、今でも遠征が続いていること、サッカー部でオランダに行きたくて西高に入る人もいるということを知ると、自分(自分達)が大きな一歩を踏み出す機会に立ち会えたことが率直に嬉しい。企画運営を行っていただいた方々には、今でも感謝の気持ちでいっぱいであり、今後も、賛否両論聞くことがあるが、ぜひ続けていって欲しいと思う。

今でもサッカー部の仲間と会って話をすると、当時の練習や合宿、試合・大会の話で盛り上がる。結果がどうであれ、同じ目標に向かって同じ時間を共有したからこそ、一生ものの仲間ができるんだと思う。自分たちにすばらしい時間を与えてくれた『サッカー部』が、今後も変わらずにあり続けることを願っている。

56 期

56 期 牛込 陽介

西高サッカー部 56 期・牛込陽介です。

56 期は本当に不真面目な学年でした。

基本的にはトンボはかけません。

ランニングの日は欠席者が多いです。

後輩にボールを取られると怒ります。

正直、もし 56 期が後輩や先輩、または教え子だったらと思うとぞっとします。

僕は 3 月生まれですが、あと 1 ヶ月遅れなくてよかったです。

この場を借りて母にお礼を言いたいと思います。

ただ 56 期は、本当に楽しい学年でもありました。

カリスマ芸人、水芸人、天気予報芸人、三流芸人など、人材も豊富でした。

そして笑いを力に、運に変えることでそれなりの成績を残すことができました。

正直、56 期じゃなかったら学校を面白いと感じられなかったと思います。

僕は 3 月生まれですが、あと 1 ヶ月遅れなくてよかったです。

ついでに父にもお礼を言いたいです。

迷惑をかけた先輩方、後輩達、そして顧問の先生方、ありがとうございました。

56 期のメンバーはあまり会っていない人が多いけど、これからもよろしく願います。

西高サッカー部 57期の思い出

57期 御巫 清英

私が高校サッカー部の思い出を聞かれると、まず真っ先に思い出してしまうのが卒業式である。高校生活の間、色々なことに首を突っ込んできた私は、光栄なことに卒業式の答辞を読ませていただくことになった。当初、何について話すか少し迷った。記念祭や運動会やクラスマッチなどありとあらゆる行事に携わってきただけに、どれも思い出深いものばかりであったが、やはりサッカー部のことを中心に話すと決めた。なぜこの答辞を思い出するかというと、ある部員の反応が非常に印象深かったからである。

当時の西高サッカー部は大塚先生と田中先生の指導のもと、成績を徐々に伸ばしてきていた。54期の都ベスト16(?)をきっかけに都大会出場の常連になってきていた。我々は決して個の力は強くないため、集団で戦うことを常に意識し、ミーティングでは毎試合ごとにビデオをチェックし修正を図ったものだった。

時には食べ物や飲み物をコンビニで買って、荻窪のある部員宅へ夜な夜な押しかけ、10人程でビデオを見た日もあった。また、対戦相手のビデオを事細かに分析し、ディフェンスリーダーの有馬は石神井のスタメンの名前と特徴を空で言えるようになったこともあった。西高付近のファミレスはもはや我々の溜まり場と化し、くだらないことやサッカー談義に花を咲かせ、帰るのが遅くなったものだった。

こんな生活の中で、私が「手に入れられたもの」とは何だろう。答辞作成にあたって深く考えさせられた。そして出した答えが「自信」である。

私は中学の時に東久留米のクラブチームに所属しており、周りは上手い奴ばかりだった。お互いに相手の批判をし合い、息苦しい環境だった。悔しいことに本当にみんなサッカーが上手く、ついて行くのが精一杯の状況の中で必死にもがいていた。

中学と高校での一番の違いはお互いに認め合っていたかどうか、だと思う。そこが正反対だった。ただ、西高は私の中学のチームメイトがいるチームに、勝てた。個では確かに負けているのに、集団で勝つことが出来たのである。我々がしていることは間違っていないと確信すると同時に、自分たちは強い、やれば出来るという自信が体の底からみなぎって来るのを感じた。その自信はサッカー以外の場でも共通のもので、57期の受験結果が良かったのは言うまでもないだろう。

このような内容の答辞を読むと、私が中高と一緒にいた与儀は、号泣した。その後の「卒業生の歌」が歌えなかったらしい。だからと言って卒業式後のカラオケで歌うことはないと思ったが、彼には唯一の心残りだったようだ。かなり笑い話の色が濃いエピソードだが、彼は気管支炎で医者にはサッカーは出来ないという通告をされてから奇跡の復活を成し遂げた男で、共感してくれる所が多くあったのだと思う。部員と部員が尊敬で

結ばれている関係は自信を生み、お互いのピンチを救い、結果を出し、それがまた自信につながる。これが私たちのパワーの源であり、居心地の良さを作っていたのではないだろうか。

なにかとご迷惑をおかけした大塚先生や田中先生、厳しい要求が多かった 56 期の先輩や、一緒に笑ってついて来てくれた 58 期の後輩達をはじめ西高サッカー部の皆様、またチューリップの会としていまだに親交の深い 57 期の保護者の面々等お世話になった皆様、会う機会は少ないかもしれませんが、西高サッカー部 57 期をこれからもよろしく申し上げます。

西高サッカー部で得たもの

58期 齊藤 潤

僕は西高、また西高サッカー部に入って、他の所では得ることができなかった本当にたくさんの経験をする
ことができたと思います。

それはまず、自分で考えるということです。これは、顧問の先生方が僕たちのことを信頼しいろいろな意見を聞き入れてくれたり、自主性を重んじ自分達で考えた練習メニューをやらせてくれたこと、またサッカー部の仲間がそういったことをみんなで、進んで楽しんでやることのできる人だったということが大きかったと思います。時には対戦相手のビデオを元に、何人かでファーストフードで相手について研究したこともありました。サッカーの面では、自分で考えてプレーする、ということは本当に高校の間に成長したと思います。今考えると中学までは信じられないくらいに何も考えていなかったですが、西高サッカー部の環境が自然と自分で考えるということを出来るようにさせてくれたんだなと思います。

また、僕は58期の部長をしていたので、その部長の仕事を通して得たものもたくさんありました。

僕は中学までは特に何かの代表のようなものを行ったことがなく、周りをまとめたり何かを決める時に進んで自分の考えを出すということはありませんでした。でも部長という役職についてそのような態度は変えざるを得なかったと思います。誰もが面倒くさいと思ったり他の人に任せてしまいたいと思うことはあっても、結局は誰かがやらなきゃなりません。サッカー部の場合は部長である僕にその仕事が回ってくるが多く、初めの頃は嫌々自分でやっていたような気がしますが、次第に上手くそれらのことを分担しみんなに割り振るといことも覚えていけたと思います。こういうことは、団体をまとめる立場でないと経験出来ないと思うし、実際に現役の頃は大変で辛かったと思うけど、今となっては良い経験をさせてもらったと思います。

また他の部員よりも顧問の先生と話す機会も多く、先生の言うことを部員に伝えたり逆に部員の意見をまとめて先生に伝えるといった、間に入るようなこともあったと思います。こういった状況も、これから大学から社会へと出て行くにあたって大きな経験になったと思います。

最後に、自分を様々な面で成長させてくれ、また素晴らしい先生や一生付き合っていきたいと思える友達に出会わせてくれた西高サッカー部に感謝です。

西高サッカー部創立60周年記念を祝して

59期 加藤 裕

私の西高校での三年間、特にサッカー部での活動は、幼少の頃から抱いていた夢を実現するための大きなステップとなりました。少なくとも漠然とした“夢”を明確な“目標”へと変えることが出来たという意味でも、西高サッカー部で過ごした時間はとても有意義なものでした。

中でも、先生方やOB会を始め、土屋先輩(40期)、大塚先輩(35期)、大見先輩(44期)、御巫先輩(57期)を始めとする諸先輩方や、高井さん、相川さん、豊田さん、三宅さんを始めとする保護者の方々の理解・サポートによって実現した第3回ヨーロッパ研修では貴重な経験をさせて頂き、それが直接的に自分の進路決定に影響しました。換言すればこの研修なくして今の自分はなかったもので、関係者の方々には本当に感謝しています。

また、卒業後OBという立場となり、合宿同行などサッカー部に関わる機会を頂いて、後輩達の成長や技術的向上に貢献出来ればという気持ちを持ちながらも、自分自身の指導力向上を目指し指導実践の場として勉強させて頂いております。特に顧問の田中先生、津野田先生からは、高校時代とは違う接し方をして頂き、学ぶべきことが沢山あるので、今後も主体性を持って積極的にサッカー部に関わることで自分自身もより多くのものを得たいと思います。

個人的な話になりますが、現在はJFA公認C級コーチのライセンスを取得するなど、指導者を見据えた活動をしながら、大学では生涯スポーツという学問を専攻しアスレティックトレーナーやフィジカルコーチなど現場で直接スポーツに関与することができる様々な選択肢を視野に入れながら、大学の体育会でサッカーに関わって“広く深く”をテーマに自分が本当にやりたいことを模索中です。いずれは、西高サッカー部での経験を生かし、スポーツ振興の観点から、スポーツ環境を整備し、地域社会に寄与するという意味でも、より多くの人が豊かなスポーツライフを構築出来るような“スポーツとの出会い”を提供出来ればと思っています。

最後に、西高サッカー部創立60周年記念誌の執筆に当たり、OBとしては最年少ではありますが、我々59期一同今後とも年代を越えてコミュニティを広げていければと思います。さらに、これからの西高サッカー部の益々の活躍と発展を願って出来る限りのサポートをして参りたいと考えていますので御協力宜しくお願いします。